
逃亡

右ムータロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃亡

【Zコード】

N42410

【作者名】

右 ムータロス

【あらすじ】

某日某所 夜

若い男がひたすらに逃げていた。

彼を追うものとは?

彼の負うものとは?

初投稿で戯言・人間シリーズ二次創作です！
文才は零ですがよろしくお願ひします。

オリ主と原作キャラの会話メイン。
原作キャラは誰が出るかお楽しみに。

(前書き)

あらすじに書いた通り、経験も文才もない稚拙な文章です。
原作キャラがかなり崩壊していますがお許しを。

俺は仄暗いトンネルを必死に逃げていた。

名前？自己紹介？

そんなものはこの危機から逃れ切つたら嫌になるくらいにしてやる。

まあ、ウチの家賊はちょっと特殊だから、関係ない側の人は無関心だし、ちょっとでも俺達の側に関係ある人間ならただただ嫌悪するだろう。

どちらにせよあまり良い反応は返つて来ないのだ。

そして俺が危機と呼ぶ追跡者は、手短に話すな～＼赤くただひたすらに、赤く朱く紅いのだ。

俺だって一応まだ覚醒したてとは言え、曲がりなりにもプロのプレイヤーだ。

普通の相手なら逃げたりせずこきつちつ相手してやっている。

さつきまで、本当にしきしきまではちょっとばかし名の知れた雑技団の下っ派と殺り合いになつて戯つてきたばかりなんだが、どうやらこれが不味かつたらしい。

恐らくはその時ことばっかりを喰つた奴らが赤色を呼んだんだろう。

まあ今更どうにもならないのだからそれはそれと置いておく事にしてと。

俺達の世界では、特にウチの家ではこの赤色との接触は絶対的にタブーとされている。

なぜなら、俺達は家賊を見捨てないからだ。

聞く所によると件の赤色も随分と身内には甘いらしいが、それにしたってウチ程ではないだろう。

俺はある赤色に勝っている所なんてほとんどないと断言出来るが、同時に家賊への絆だけに限つて言つながら間違いなく勝つているとも断言出来る。

なにせもし家賊の誰かが殺されたなら、いや、事によると敵対したというだけで、相手を文字通り全滅させ殲滅するまで終わらない報復が始まるのだ。

誰かが失敗して死んでもそれは止まらない。

故に家賊に課せられたルールは一つ。

まあ、正式なルールではないけれど。

「自分が、もしくは家賊の誰かが勝てる相手以外には決して負けるな」

だからこそ人類最強の赤色と戦つてはいけないので。

こと赤色だけは、別に音使いのに一ちゃんとなくとも家賊のほとんどが逃げ出すだろう。

それは正しい判断だ。

赤色と相対して、いや相対すべからなら音使いのこーちゃんとか変態アーニキとか逃げ出さないだろ？

でも敵対しても尚且つその状況を楽しむ、なんて事はあのくそったれた秘蔵つ子ぐらいしかいないだろ？

アイツだけは家賊と思えない。

もちろんアイツが殺されちゃったたりしかりと仇討ちはしてやるが、第一にアイツの方が俺達を家賊と思つてゐるよ！にせ全然みえない。

変態アーニキはなんだかんだいっても優しいからそんな事はないと何かについて構つているが、家賊の為を思つたら赤色と戦つたりなんてしないだろ？

今の俺みたくどんなに不様でも必死こいて逃げ出すはずだ。

それが普通つてもんだ。

いや、言つて直そう。

こんな俺が「普通」なんて言つのはそれこそアイツ好みの傑作になつちま'。

それだけは御免だ。

逃げ出すのがウチの家賊での「普通」だ。

ああ、他の俺達の世界の人間達の普通なら赤色もそつだが、ある意味では赤色以上に俺達家賊に関わる事の方がタブーだつたりするのか？

さつきの過剰な家賊愛があるし。

……なんてね、そつは言つてもその過剰な家賊愛こそが俺達家賊でのゝ普通くだ。

あ～なんかわからなくなつてきた。

結局は自分のゝ普通くを他人に押し付けるくらいしか出来ないよな。

「……ん……ひ……る……え」

嫌な、音がする。

「鬼さんこちら、手の鳴る方へ」

嫌な、音がする。

「鬼さんこちら、手の鳴る方へ」

進行方向の大分先、そこには案の定街頭もなく仄暗い中そこだけ赤るく赫かがやいているかのように紅い、長身の女性が

陽気に手を叩きながら笑つていた。

くつ、なんたる失態だ。

姿が見えなくなつたからと油断して余計な事を考へるつむ、自然と歩みが緩やかになつていたらしい。

しかし、考え事に没頭していたとは言え俺だってプロのプレイヤーだ。

その間も周囲への警戒を怠つていた訳ではない。

そして当然トンネルは一本道。

もちろんトンネルの途中までは姿も見えていたから、例えばトンネルを戻り外へでて、反対側からこちらに向かふとすればその距離はここまでのおよそ3倍だ。

いくらなんでもそんなルートは辿らないだろ？

となるとこの一本道、気づかれずに追い抜くのは普通なら随分と骨が折れるはずだ。

にも関わらず俺に気づかれる事なく追い越しているのはさすが人類最強と言った所か。

といふか並のプレイヤーなら俺に気づかれて物理的に骨を折られて命じと持つていかれるだろうに。（…ジョークだよ）

こちらも即座に臨戦体勢に入る。

と、言つてもただ心構えを変えただけで、本気の戦闘をするつもりはさらさらない。

ただ一発放つ、当たるかすらも関係ない。

その僅かな隙に今度こそ逃げ切ろう。

一瞬程度の敵対ならどうとか事実を揉み消せれば家賊とあの赤が戦う事はない。

そう、こいつって家賊を第一に考えるのが俺達の普通なんだ。

家賊の為に自分を殺せ、とまでは言わないし言えない。

だが自分を多少抑えつけるくらいは必要なんだ。

俺はあんな奴とは違う。

そう考えながら相手に向かつて疾走する。

向こうもさすがにさつきまであんなに必死に逃げていた男がまだ望みのありやうなうちに諦めて戦うとは考えないだろう。

怯ませるには先手こそが最善だ。

「んあ？ なあに物騒な面してんだよお前。

安心しな、アタシはお前と殺り合いに来た訳じゃねえ。
依頼もなくお前に手なんか出すかよ」

ちつ、これで先手の優位はなくなつたか。

「生憎と僕には依頼なら心辺りがあるんでね。
大方、さつきの殺り合いに巻き添えを喰つた一般人か企業つて所で
しょ？」

もう少しで射程範囲だ。

最初の一撃に
全神経を集中する！

「」名察。

と褒めてやりたいが残念だつたな。
アタシを知ってる一般人は少ないし、知ってる企業ならたがが一人
追うのにアタシを呼ぶのは釣り合わない。
お前がアタシを呼ばないとどうしようもないトコに属してるのでト
コまで知ってる奴は手を出したがらないよ。
例えアタシを介しても関わりたがらないだろうよ。
ま、名探偵を気取るには随分と早かつたつて事だな

と、赤色はそこまで言ひとシニカルに笑つた。

「じゃあ一体何しに来たんですかこんな所まで。
逃げていた苦労を歸して下さい」

「簡単だよ」

そうして赤色は笑顔のまま

「お前の家賊に関して聞きたい事がある
俺の右肘関節を極めていた。

赤色が搜してて、家賊絡みなら…
やはりアイツか。

くそつたれ、だからアイツは家賊と思えない。

「うやつて実際に家賊に迷惑がかかる。

自覚してるのかしていないのかは知らないが家賊の迷惑を顧みないし一切鑑みない。

出来ればこのままこの赤色から逃げ続けて、逃げた先で野垂れ死んで欲しい。

「残念ながら知りません。

もし知っていたら他にも彼を捜している家賊を知っているので、真っ先にその人に連絡しますよ」

あんな変態に連絡する気などさららないが、それでも赤色に教えるくらいなら俺は変態アーニキに知らせていい。

「ああそうかい。

「まだ何を聞きたいかを言ってないぜ？」みたいな会話がないけどまあいいや、すまなかつたな。」

いや、言つた所でこの場合、

「そりゃあ貴女との間でウチの家賊が現在抱えてる問題はアイツくらいですから。

というかその事と

アイツの居場所を知つているかどうかは無関係です」と、冷静に返せねばなんの問題もない。

「それと、素直に自分の事を俺つて言つてもいいんだぜ？」

は？！

… そういえば赤色つて読唇術ならぬ読心術を心得ていたのだったか。

「もちろん読唇術だつてマスターしてんぞ？」

それといへり主人公のキャラが途中途中小さくブレるからつて内心と発言のキャラを大きく変えて」まかすなよな、そんなんじや行く末は詐欺師か奇術師くらいだぜ？」

知つてたんなら黙つて下せー。

「ひらひら、地の文が丁寧だぞ？」

丁寧じや ありません！冷静な時はこれでいいんですーー！

「ー。（こんな）つけた時点で冷静はないだろ……」

ていうか心が読めるんだつたら質問なんか意味ないじやないですか。

「お前は本気でバカなんだな。
アタシが読めるのは

「心」だ、「記憶」じやない。

質問しなきゃ知つても思い出れないだらうが。

それともあれか？

質問の必要がないくらいお前はアイツの事を四六時中、心に映しだしてゐのか？」

赤色はまたシーカルに笑う。

んな訳あるか！知つてたらまづは自分からあの放蕩家賊をひつぱたくわボケ。

「わかつたわかつた、それじゃあな」

少し歩いて自分のものらしい外車（田に痛いくらい真っ赤なゴブランだった）に乗り込みエンジンをかけると、まるでまた会おうとも言ひように親しげに大きく手を振りながら去つていく赤色。

「親しげに、じゃねーよ！」

アタシとお前はもう友達なんだ、次名前以外で読んだらマジ殺すからなー！」

…なんか叫び声が聞こえてきた。

下っぱとは言えプロのプレイヤー一人を戦つた後にあんな壮絶な逆く鬼！」ひだもんな、幻聴も致し方あるまい。

「…視して…やね…ぞーー！」

また怒鳴り声が聞こえたが、今度こそ幻聴かと思ひ程小さな音量だった。

やはり赤色は忙しく戻つて来て俺を殴りつける暇などないのだろ？。平和的に話を聞こうとしたらいきなり逃げ出した俺の態度など多忙の彼女の身にはさぞかし迷惑だったろう。

あ、なんか凄いさみしい優越感。

(後書き)

いかがでしたか？

なんだかんだ言つて原作キャラは一人、戯言・人間シリーズの用語も敢えてあまり出さなかつたなんですが楽しんでいただけたでしょうか。

今後もネタさえ浮かべば他のキャラと絡ませたいです。

ちなみにオリ主の名前や容姿、二つ名や武器などの諸設定は決まつてるので次の機会があれば紹介したいです。

感想を楽しみに待つてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4241o/>

逃亡

2010年10月21日04時40分発行